

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主論文の要旨

論文題目 江戸後期文芸作品をめぐる食と養生

氏名 畑 有紀

論文内容の要旨

本論文は、食物を描く江戸後期の文芸作品を対象とし、食養生の概念が文芸作品に及ぼした影響を考察するものである。当該作品に描かれた食物の位置付けを、生産や流通の状況、認知度、食物本草上の効能・害毒などの面から、当時の生活に即して検討することで、食養生が養生書や医学書だけでなく、文芸作品にも表現されていた事実を指摘する。そして、そのような文芸作品の成立に至るまでの文化史的背景、つまり、食物を描く文芸作品の系譜を明らかにすることで、江戸後期、食物に対する人々の関心や観点が多様化する事実を明らかにするのが、本研究の目的である。

なお、本研究でいう文芸作品とは、黄表紙、滑稽本などの草双紙、絵巻、錦絵など、いわゆる文学作品、絵画作品を対象とする。従前の研究において、このような作品は、主に文学史や美術史の観点から論じられており、特に食を描く作品については、歴史資料としてのみ用いられ、あるいは看過されることがほとんどであった。

これに対し本論文では、食物を描く文芸作品を、当時の食生活だけでなく、食物をめぐる文化が投影された表現媒体、すなわち、人々の食物に関するさまざまな知識を反映した媒体として位置付ける。その上で、文芸作品と食物、さらに食養生の連関を考察するのである。

本研究の考察方法は、これらの文芸作品について、作品同士の比較から、作品同士の相互関係や影響関係を把握しようとするだけではない。当該作品に描かれた食物を分類、一覧化した上で、類書、本草書、生産記録などの歴史資料を用い、描かれた食物が、その時代の人々にどのように認識され、利用されていたのかを実証的に捉える。描かれた食物に対し、各歴史資料に示された当時の生活のなかでの位置付けを行うことによって、当該文芸作品を各作品が属していた時代のなかで読み解こうとするものである。

本論文は、序章および終章のほか、三部、六章より構成される。第一部では、文久二年（1862）の麻疹流行に係る文芸作品として、麻疹絵、そして滑稽本『麻疹太平記』を取り上げた。第一章では、麻疹絵の詞書に示された、麻疹の治療・後養生によいとされる食物、ならびによくないとされる食物のほか、麻疹絵の図様とされたモチーフを分類し、それぞれについて、江戸後期の生活のな

かでの位置付けを検証した。

特に、詞書のなかで治療・後養生によいとされた食物と、よくないとされた食物に関する検討では、それらの食物がいかなる基準で二分されたのかを、食物本草の面から考察した。『享保・元文諸国産物帳』（享保二十年～元文三年・1735～1738 編纂）、『明治七年府県物産表』（明治八年・1854 編纂）から、画中に示されたすべての食物が、江戸後期に広範囲で生産されていたことを、さらに、江戸後期の見立番付を通して、これらの食物が日常のおかずとして用いられた、一般的な食物であることを論証した。

そして、食物本草書『和歌食物本草』（寛永七年・1630 刊）、『食物能毒編』（弘化五年・1848 刊）などを用いて、各食物にあてはめられた効能・害毒を分析することで、画中でよいとされた食物は効能が多く、よくないとされた食物には害毒・制限が多く記述されていることを指摘した。これらのことから、麻疹絵に挙げられている食物は、当時の一般的な食物のなかから、食物本草上の知識に沿って選択されたものであり、麻疹絵が、摂取すると効能が多いものを推奨し、害毒が多いものを抑止する、読者に食養生の情報を教示する効果をもった文芸作品であると結論付けた。

また、麻疹絵の図様のモチーフには、上記した食物、薬、麻疹除けのまじないなどが用いられている。これらのモチーフと、鬼子母神を含めた当時の信仰や、麻疹養生書の記述などとの関連を検討することによって、麻疹絵に示された情報の多くが、当時の人々の知識や習慣から生まれたものであると論じた。

第二章では、麻疹絵と同時期の作と考えられる『麻疹太平記』を分析対象とし、作中の食物が、麻疹絵同様、日常的な食物のなかから、食物本草の知識に則って選択されている点を述べた。同作は、擬人化された病と薬が合戦を行うというもので、病方について食物と、薬方について食物をそれぞれ、上記した調査記録や見立番付、食物本草書を通して分析した。その結果、『麻疹太平記』に描かれる食物も、麻疹絵の食物と同じく、当時の生産量、認知度が高いものであり、食物本草上の効能・害毒に則って区別されていることを明らかにした。

一方で、同作には、麻疹絵や麻疹養生書など、麻疹流行時の情報伝達媒体に比べ、具体的な魚類の名称が多く挙げられている。御伽草子や黄表紙などには、魚類と鳥類、魚類と精進類といった、食物の優劣争いが複数存在することから、『麻疹太平記』が、このような食物の優劣争いの物語の系譜上に生まれたものと位置付けたのである。

さらに、『麻疹太平記』や麻疹絵のように、食物本草の知識を反映した文芸作品が生まれた理由として、江戸中期から後期にかけての本草学の発展を挙げた。特に、食物本草書『食物能毒編』（弘化五年・1848 刊）や救荒書『民間備荒録』（宝暦五年・1755 刊）といった書の記述を通じて、これらの分野において啓蒙意識が高まっていた事実を示した。

以上に見たように、幕末、食物本草が文芸作品に表現されたことをふまえ、続く第二部、第三章では、食物本草書そのものの表現に着目した。江戸初期、『和歌食物本草』（寛永七年・1630 刊）をはじめとする和歌形式を用いた食物本草書が成立した理由を、本草書や医学書の伝統や、教訓和歌の系譜から考察したのである。

『和歌食物本草』の成立に関係したと考えられる曲直瀬道三の著書からは、彼が、初学者を讀者

とする複数の著作において、漢詩や和歌など特殊な形式での記述を行ったことを指摘した。漢詩形式の利用は、明代、清代における本草書や医学書に多いことから、道三の記述形式の工夫が、これらの書からの影響を受けたものと考えた。また、本草書や医学書への和歌や漢詩形式の利用が、江戸初期のみならず、後期まで受け継がれた事実についても論じた。

なお、室町時代から江戸初期にかけては、和歌や連歌の形式を用い、日常の訓戒、家職や芸の教訓を詠んだものが多い。室町から江戸初期に同名の歌集が繰り返し作られた「西明寺殿百首」や『世中百首』（大永五年・1525）、『龍山公鷹百首』（天正十七年・1589）、『蹴鞠百首和歌』（永正三年・1506）などが、その例である。このため、和歌形式の食物本草書が、このような風潮のなかで生まれた可能性についても言及した。そして、五・七・五・七・七という和歌の韻律だけでなく、定数歌、いろは歌といった伝統的な和歌文化が、知識の暗記、暗唱に活用されていた点も述べたのである。

以上の第一部、第二部の考察から、食物本草の知識が、錦絵や滑稽本、和歌などという、さまざまな形態で表現されていた事実が明らかとなった。しかし、文芸作品のみに目を向けた場合、江戸後期までの作品において、食物が主体として描かれた例は非常に少ない。そこで第三部では、食物が描かれた江戸後期の文芸作品を分類、整理し、文芸作品と食物との関連、さらには、文芸作品に描かれた食養生を考察した。

第四章では、室町時代から明治初期まで、さまざまな文芸作品の題材とされた「酒餅論」、すなわち、酒と菓子（餅）の優劣争いを描く作品を取り上げた。黄表紙『腹中能同志』（刊年不明）、錦絵「太平喜餅酒多々買」（天保十四年～弘化四年・1843～1847 刊）をはじめとする、江戸後期の当該作品に表れた、酒や菓子に関する語に着目した。

これらの語を一覧化した上で、「酒餅論」作品中の酒と菓子に関する語について、酒に関する語のほうが、作品間での共通度が高いことを指摘し、その背景として次のような点を挙げた。まず、江戸の菓子屋で、各店の名物たる菓子が生まれるのは、江戸中期以降のことであり、江戸時代以前から南都、伏見、伊丹などの名産地が知られた酒に比べて、菓子に関する知識があまり共有されていなかった点である。

さらに、江戸後期でも砂糖は高価なものであったことから、国内で砂糖の生産が増加するのは、江戸中期から後期であること、また、江戸後期においても砂糖は高価であり、砂糖を大量に使用する飴菓子や金平糖の類は、多くの人々の生活のなかでは一般的でなかった点である。以上の理由から、「酒餅論」作品間で、酒に関する語に比べて、菓子に関する語が共通していないことを論じた。

加えて、酒を題材とする見立番付「銘酒づくし」、絵双六「新版伊丹銘酒品目」などの情報との比較を通じ、作中の語が、見立番付・絵双六に繰り返し挙げられていることを示した。その上で、「酒餅論」作品や見立番付などに挙げられた語を、江戸後期の江戸への下り酒の流通状況と対照した。

なかでも、池田酒の没落と、灘酒の台頭が、「酒餅論」作品や見立番付に反映されていない点から、これらの版本に描かれた情報が、当時の酒の流通量や評価とは合致していないことを論証した。これにより、「酒餅論」作品は、人々の間で既に普及していた認識を反映してはいるが、最新の情報や流行を取り入れた文芸作品ではなかったと結論付けた。

第五章では、室町時代の『酒飯論絵巻』に始まる、食物同士の優劣争いを描く文芸作品と、食物

本草との関連について検討した。『酒飯論絵巻』は、初めて食物を主体的に描いた文芸作品とされるが、描かれた食物の選択にあたって、食物本草からの影響は窺えなかった。

他方、江戸後期の文芸作品のうち、食物を擬人化し、それらの優劣争いを主題とする複数の作品に、食物本草からの影響が窺えるものがある。食い合わせを題材とする黄表紙『腹京師食物合戦』（安永八年・1779刊）や、麻疹の治療・後養生によいとされる食物とよくないとされる食物の合戦を描く錦絵「麻疹能毒合戦図」（安政六年・1859刊）がその例である。

また、「青物魚軍勢大合戦之図」（安政六年・1859刊）など、食物同士の優劣争いを描く幕末の錦絵には、政争風刺、時事情報の伝達といった意味を付加されたものがあることも示した。このことから、食物同士の優劣争いという主題は、『酒飯論絵巻』や「酒餅論」作品など、室町時代の文芸作品の枠組みが継承されたものでありながら、江戸後期には、名物や名産といった物産情報のほか、食物本草の知識をふまえて描かれるまでになったとの結論に至った。

第六章では、養生を主題とする錦絵「飲食養生鑑」、「房事養生鑑」（どちらも刊年不明）を取り上げ、両画の詞書を翻字し、『長命衛生論』（文化九年・1812刊）、『養生手引草』（安永五年・1858刊）といった、当時の養生書の記述との対照を行った。その上で、黄表紙『十四傾城腹之内』（寛政五年・1793刊）、錦絵「心学身之要慎」（江戸後期）など、体内の臓腑を擬人化した物語を描く、先行する文芸作品の内容と比較した。

これらの考察から、飲食や房事に対する戒めが明示されていること、そして、当時の最新の科学知識に則った臓腑の全体像を示すことが、二画独自の特徴であることを明らかにした。また、特に「房事養生鑑」については、従来、過度の房事の戒めを説いた画とされてきたが、房事への戒めよりも、妊娠や出産時の女性の身体の解説が主となっていることを指摘した。その背景として、蘭学を含めた、解剖学や産科学の発展を挙げた。

同章では、本研究の今後の方向性として、明治期の食養生関連書と、江戸時代の食物本草書との記述の比較も行った。これにより、江戸と明治の食養生には明確な差異があるものの、明治の食養生関連書は、江戸の食物本草書の形式や本草的な食物の解釈を踏襲しており、江戸の伝統が完全に排除されたとはいえないと論じた。そして、江戸から明治、さらには室町から江戸、明治に至る「食」と「養生」の連続性、それを表現する文芸作品について、継続して研究を行う必要があるとした。

以上、本論文では、江戸後期の文芸作品と食物、特に、食による養生との連関について、作品に描かれた食物の生産や流通、認知度、食物本草上の意味といった観点から、当該食物の生活のなかでの位置付けを明示しながら、考察を行った。そして、江戸後期の人々の食物に対する関心が多様化している事実を明らかにした。すなわち、室町後期に生まれた、食物を描き楽しむ文化は、食物の種類、産地、身体への影響など、食に対するさまざまな認識を反映させながら、江戸後期に至るまで享受されていったのである。

なお、食をめぐる問題は、言葉遊び、芸能など、さまざまな論点から総合的に研究する必要がある。しかしながら、養生という視点から食を研究することで、これまで一面的にしか捉えられてこなかった、食をめぐる文芸作品を、文学、美術、食文化、医学など、江戸後期の社会や生活を多角的に検討する材料として活用する余地があると提示したところに、本研究の意義がある。